

松浦佐用媛石魂録

後編

三

913.5
マ
後前 3

松浦佐用媛石魂録後編卷之三

東都 曲亭主人編次

第十五回

雞見と辨と無名氏警と垂る

却説秋布主従は。不測は必死と免まじ。六波羅の捕手の頭人海原澳進と名告まる者の影  
兵等小牽立られ。偏拵庵と出る折。主従齊一思ふやう。この海原澳進は。盜賊追捕と職と  
いふが。賊情と察せをいて。惡憎師弟と疑ふ事なく。還く俺們主従が。陳むる由を聽さ  
し。彼虎よりも狼よりも。懼いと謂々ん。酷吏にこそありつらめ。遮莫のくりなく。奸賊  
の毒手と脱きて。六波羅殿へ牽る事。おほ切ても。幸あり。彼處で糾問せられん時。執權  
の御印ある。仇討免許の御教書と取出く。武州小(時村をいふ)見せ奉らば。冤枉を釋るべ  
し。爾りとも仇討の宿望とまご遂を。鈍くも賊謀らまじ。辨らまじ。阿容く。と六波  
羅へ牽まじ。と。鎌倉までも聞かば。只主従の上のまゝ。亡親良人の恥ありか。左



よも右ふも禍鬼の祟りと穢ふ科戸の風。吾儕が爲に吹むや。と形さき世と憤る間ト  
懐ひといへばえふ。岩摺む驚も獵戸。獲らきての只餌ふ求婿る。時の勢ひせん術もふく牽  
る。隨よゆく程よ。ふほ心得がたいた。澳進も夥兵等も京師の方と背ふ。浪速の方ふ  
赴きたり。登時秋布も俊平も再び心ふ思ふやう。この海原とういふもの共も。六波羅殿の  
下知ふ従ふ。捕手の武士よの非む。俺們が懐ふ。物ある事をよく知り。甲夜ふ宿りと  
見届く。彼賊僧等が仗倆の裏と。かく詭謀。者ふやあらむ。然らば亦俺們を何處まで。將  
行べた。人迹稀ある郊原と。殺。財と略るあらめ。此ふ至りて思ひ合。裏。俺們  
が陳むるよ。一言半句も聴ざり。又惡僧等を疑ふ。搦捕んともせざり。肚裏  
一物ある。騙賊の手段あらん。是前山ふ虎を脱ぎ。又後原。一。過る。似。主従  
が。死期。再び近づた。又今更。數んや。騒ぐ氣色。ありけり。有然程。海原澳進  
の。頻ふ夥兵といを。そが儘。秋布主従。率も。十町。あまり。いと長。や。ある  
松原の。在右。の。渺々たる水田ある。一路上と過る時。東に既。ふ。みけり。當下海原澳進の。

夥兵等を呼留。さの。速くゆく。及。此。早く相計。へ。いと。い。ひ。つ。つ。袴の。後と  
り。小堤。尻と打掛。秋布と俊平。今澳進。云々。い。ひ。つ。つ。よ。と。う。ち。聞。扱。  
え。この。處。俺。們。を。殺。す。こ。そ。よ。く。所。き。う。と。云。ぬ。計。一。惡。び。き。も。せ。む。立。在。を。夥。兵。等  
の。澳。進。が。邊。近。く。牽。戻。さ。る。主。従。の。縛。の。索。解。捨。く。い。ざ。と。く。懸。く。立。退。き。く。  
主。の。左。右。ふ。つ。い。る。さ。る。絆。み。を。豫。之。の。尋。思。違。ひ。秋。布。も。俊。平。も。是。の。什。度。と。バ。り。且  
驚。き。且。呆。ま。き。忙。然。と。少。選。の。事。問。ふ。べ。く。も。非。ざ。り。と。疑。惑。さ。こ。そ。と。澳。進。の。含。笑。あ  
が。ら。左。見。右。見。つ。秋。布。主。従。は。打。對。ひ。縁。由。と。告。ざ。り。け。き。バ。さ。ず。訝。しく。思。ひ。ま。ん。然  
と。識。ら。ぬ。ど。ち。よ。に。あ。ら。ぬ。某。と。志。き。給。ひ。敷。さ。の。ふ。音。羽。の。瀧。の。糸。む。を。被。も。他。生。の  
縁。其。折。つ。ら。く。相。せ。し。御。身。主。従。昨。夕。は。逼。る。厄。難。既。見。ま。り。貞。烈。孤。忠。の。主。従。と。看  
殺。し。ま。す。べ。く。も。非。ず。い。う。で。竊。は。救。ん。も。の。と。思。ふ。も。老。婆。親。切。ま。り。徐。に。跟。と。附。け。行。く。  
果。て。偏。枯。林。ある。賊。僧。は。宿。り。を。討。く。自。ら。死。地。に。陥。り。給。ひ。ぬ。知。ら。む。や。件。の。賊。僧。は。太。宰。の  
經。高。が。舊。臣。ふ。邊。航。の。平。次。將。純。と。呼。れ。者。ん。又。其。徒。弟。の。青。入。道。の。將。純。が。若。黨。あり。

岩幕九郎即こまに。往し經高没落の比。彼等主従西國と。いち早く透電し。主の先途を見  
る心も亦く。只顧し世と潜ん爲鬚を剃り姿と變じて。抖擻行脚の法師は打扮。彼此を徧登し  
。京師近く旅宿せし比。偏拈菴の頼破し。無住ありしと取立んと。推て菴主は爲しより  
。行客を欺き留め。衆人となく殺害し。衣賞盤纏と奪略る。殘忍無斬の癖者。其おしと知  
るるにより。奇術と以てかくの如く。貌を更影兵を將。六波羅殿の御内人。海原澳進と云  
。偽稱し。御身主従と救ひし。孝烈孤忠を愛まば。深くを疑ひ給ひと。心の底と説諦  
を。思ひがけおれた人の誠。主従再び驚きあがら。こゝは初々暗を定め。這無名氏と熟視  
まば。現きのふ音羽し。假深ふものをいひま。彼脱社參の少年。其折は年齢の十六七  
と見えたりし。けふ人柄重くきて。二十五六の壮佼。とむりより。疑ひの。おほ解く  
べくも非ざまば。秋布頻りに驚嘆し。圖らざりける好意。大厄難を極ま。再生の恩人  
の實名とども告られむ。何をよまがふ再會。這回の報ひをあすより侍らん。離奇術  
のありとも。きのふ路頭の乞者し。けふ影兵四五名と相従へる頭人。これら

も心得難く侍り。と云は俊平も膝と進め。和君の吾儕主従をよく知りて。いをる歟。然  
れども吾儕主従の。未だ和君とあらざり。加以左右に侍る。這影兵を何者。和君お仕る  
人々歟。然らむ外は備し。歟。願ふに具し。説示し。疑心と齊させ給へり。と。主従齊一語  
問ふ。疑念さこそと無名氏。うち笑ながら領きて。我うへとまど盡さひ。如右思はるも  
理り。こまの名も亦く姓も亦く。素より一所不住し。ある時の西に在り。又あると死  
の東に遊び。弱きと資け。柱まると拉ぎ。只善人。荷擔ま。惡棍と交り遊ば。劇孟荊荷  
が亞流し。國俗のいふ男達。唐山に云使客者流も。思へば己が身と遠らむ。且天粟の  
奇術あり。雨と召風を起し。木を刻し人とか。草と締り牛馬とを。見給へ。這影兵等を家  
僕も非む。備夫も非ず。惡入道。平次を。欺ん爲の。作りあし。る者。こまといひ  
つ。左右はついで。影兵等を皆擡擡て。掌の上。打乗をるを。と見ま。眞の人。いあ  
らで。紙と剪り。細小ある。人の體。おし。る。折ら。戦。朝風。吹散。ま。紛々。何處と  
も亦く失ふ。ければ。迹。俊平。行囊。大小の。兩刀。と。惡僧等。袈裟法衣。と。彼黄金三兩

のミ。法衣の間は遣りたる。かきひくく一奇異妙術小。主従いよく驚嘆し。且呆る事  
 半胸むりり。又云事もあがりしを。無名氏に行囊と。兩刀をとり揚ぐ。即こまを俊平は返  
 る舊の如く身は著しめ。且誠こいへりける。和殿の今の世は有難た。清白の義僕。あ  
 れども。人の心の脆たものふ。善進めバ善に移り。惡進めバ惡に移る。譬バ水の器  
 從ふ異ならず。己を和殿を相する。恐らく色慾の惑ひよりて。其身と誤つ事も有ん  
 慎み給へ。と説諭せば。俊平深く感激し。教諭定し所以た非ず。某今茲に三十八歳  
 尚初老ふども至らむし。若き後室は俱一奉る。己事を得ざる所行し。柳下惠はあ  
 ざれば。傍難免れ難きと知まり。然ども造次顛沛。戦々として怕慎。夜毎かゝる宿を  
 ども。後室と一室は睡らむ。猶いく年もかくあるべし。若この言は説をあらば。己が身天雷  
 は震き死さん。此義の心安らむ。と誓ひをさせ。秋布も亦無名氏は打對ひ。曩は仇人  
 を撃んと。鎌倉と出より日より。主従一日も復讐の志。と移さひ。さる疑難の心もつ  
 ろむ。けふまで過し侍り。猶且今の教ふより。未然を禦ぎ侍るべし。定し御身の人より

く。人あらぬ妙術あり。俺們が久後の吉凶も成敗もよく知り。こそをらめ。願ふに具  
 は示させ給へ。あうらんよの後々。事臨ま。心得。あるべし。事の多うらめ。猶此上の好  
 意ふころ。と亦他更もなく請問へ。無名氏頭を打碎。己を知らざる。あらねども天機の  
 切は漏を可らす。我の吉次兄弟の。外家は舊縁ある者あり。青瀬川道考夫婦が。鏡宮子  
 と祈り。側室玉島と獲て。遂に孽兒と産せし事も。御身が鎌倉ある。石切山の望夫石  
 の邊ふ。猛産れ出さる。皆是松浦佐用媛の。因果と惹る輪廻應報。今生ふ。果をも  
 あり。この故も吉次も。其弟浦二郎も。夫婦送相愛し。夫婦全く聚る事。輒からず。あ  
 りあれども後々まで。孝烈忠信の志。移らむ。一婦の榮え。一婦の枯ん。是も亦其親の善  
 惡二報。自由もの。亦奈何ともをべうらむ。今より。三歳の後。乾坤丸も。再會せ  
 ん。己がいふよ。と記應せば。思ひ合をる事あるべし。心得給へ。と説示せば。秋布は感涙の  
 襟と濡らむと覺む。無名氏と伏拜。君が教の氏神の。託宣と。も聞侍る。いうて。志  
 侍るべし。と云を無名氏推禁め。己れは。凡夫の爲。拜ると徳あるもの。あらねど。神

の冥助も佛の利益も。禱る者も誠おければ。手ともく虚空と拂ふふおまじ。裏小鶴岡の神の  
 託宣も。親の爲は命と捨んと誓ひ。御身が誠お依れり。只己が吉次兄弟夫妻を守り。因縁  
 ある事おまじも。生前の業報盡ねば。己が力も及び難し。御身初厄と脱きされども。又速う  
 らず再厄あらん。慎み給へ。と論いつく左邊の芝生を見うへりて。此袈裟法衣の惡僧等が。身  
 著さりけん者なれども。形狀正しく佛衣。遺して人を取らせんとく。松の枝お投掛ま  
 ば。三兩の金の片々と。落ると。見もやうで。速く袴の紐を解つ。羽織も脱捨。野糞束  
 の御身等と。救ん爲の假裝の。今いも要あり。といひつゝ。腰お著さり。煙袋を搦撈。  
 火と鑽懸る枯結縷草の。燃立邊へ袴も羽織も。投入く。焼捨る。煙お怕ま。居越の鬼の田の  
 畔より兩三隻。霜高く。去を。秋布遣ふ目送り。又無名氏うち對ひ。君の既おまられ  
 々ん。こらのをいと早くより。書を読み。歌と詠めて。人の考得難き事と。穿鑿正ま。と好こ  
 ぐ。此身の仇とあり。より生涯風流の枝を。ばせと。心は誓ひ侍り。と南殿の知し召ねば。  
 身の暇と乞まう。つる。見參の日の言次。あぢのむら鳥のあぢの義と。鶏をうけといふ。

名義と問せ給ひ。然りけまじも。こまら。のよ。こら。いも。本ど。知り侍らむ。より。心お  
 思ふよ。と。云々と。告まう。長き旅宿のとりく。博物家。値遇侍らば。よく問質。  
 て歸府の日。御土産。を。べけれ。と。答まう。せ。事侍り。た。あ。うる。今居越の鬼。立とし見  
 れ。其。事。の。了。得。思ひ。己。が。さ。か。る。時。さ。る。事。と。問。奉。る。鳥。荷。を。お。べ。け。ま。じ。も。己。が  
 爲。お。ら。ぬ。貴。人。の。問。せ。給。ひ。一。更。な。れ。ば。教。と。受。ん。と。願。ふ。の。ミ。一。言。示。さ。せ。給。へ。う。と。他。更。か  
 く。い。へ。ば。無。名。氏。の。う。ち。笑。か。が。ら。領。さ。く。そ。の。知。り。易。た。事。う。り。後。陸。畑。が。埤。雅。と。見。む。や。卷  
 の。第。八。巻。の。下。の。陸。畑。が。い。へ。る。事。あり。方。言。は。齊。宋。の。間。の。凡。物。盛。ふ。多。きを。名。づ。け。く。冠  
 といへる。事。註。は。曰。今。江。東。小。鬼。あり。そ。の。多。き。事。無。數。く。俗。は。冠。鬼。といふ。といへり。冠  
 の。和。訓。は。即。安。多。く。鬼。の。和。名。は。即。加。毛。く。あ。だ。と。あ。ぢ。と。唱。る。よ。う。た。ど。ち。と。相。通。な。れ。ば  
 也。又。鶏。と。う。け。といふ。よ。う。の。同。書。同。卷。を。お。驚。の。下。の。曰。或。い。い。ふ。鶏。の。系。べ。一。故。ま。こ  
 ま。と。系。といふ。鴨。の。押。べ。一。故。お。これ。と。鴨。といふ。といへり。か。く。ま。せ。ば。小。鬼。の。多。く。群。る。と。あ  
 ぢ。か。も。と。和。名。せ。し。も。又。鶏。を。う。け。といへ。た。も。皆。唐。山。の。故。事。は。和。訓。と。名。づ。け。の。を。系

の和訓いつたぐとも又うけるとも讀む義あり。鶏の羽あまども飛ぶ事の得あらぬ者へよ  
り糸置るゝ等一鴨も又飛ぶ事得あらず。手小唄一押のべ。よりにてこまを鴨といふ。  
鴨の和名をあひろると。今俗ふ。かもと讀むに非あり。かまきバかけろの鶏の鳴聲ふに  
非ざると。彼語のころいも。其故事と失ふ。催馬樂ふ云々と詠りを傳へたるを。無益  
の辯ふ似さきども。扣き鳴る鐘の惠。才女の爲に談むるの。と。詳小説明せば。秋  
布が歡び。云べうもあらざり。を。側聞せ。俊平も。俱に呼とぞ感ける。無名氏かきひ  
て。秋布ふうち對ひ。御身既。穿鑿學の。非と知まる事甚妙あり。穿鑿學と深く好む。廣  
博に誇る者。人の爲に一生涯。書厨とあれ。家の。家とどのへ身と修る。よまがふあるよ  
しも。况女子の博士ぶまる。傍痛さものふいて。天然良配と得る。よあらね。身を措  
小所。人小物と問る。穿鑿學の科。一生苦勞の絶ぬ者。又一俊平ふ心得  
さまる事こそあれ。執權より賜り。二百金の遣い。私に腰よ。置纏も又數十  
金あらん。若き婦人小相具。三百金と携ふ。萬里の路と無異。編歴せまく欲

まる。抑難き所行からむ。さきバころ盗難。遭る金の多き故を。こころ心一給  
へ。と。最丁寧小説論せば。主從驚き且感。いうて。明教小遠ん。後々までも心小銘。と。  
成るべ。とぞ答ける。登時無名氏天打仰。あれ見給へ。既ふえ。日いと高く昇り。と。  
思ひをも長物がさり。時の移ると知らざり。然らば秋を分さんと。皂纒の單衣の裳  
と引折。毛牒と顯。立列をんとを折。遣ふ追米る。兩箇の賊僧各々山刀と腰。と。  
手は竹槍と引提。飛が似く。近づく。無名氏估と見かへりて。これ昨宵被奴等を撃捕  
んと思ひ。うども。輝の便宜を得ざり。う。首と預置。り。得曉らむ。追鬼米つる  
。自ら其死と促。秋布の刀自主從。稻葉蔭。今霎時坐せ。先物見せん。と。  
一路上の。真中。動ぎ出。近づく。敵をまつ程。先に進。邊。迂入道。怒まる。胸臍ふり立。  
と。これ海原の大騙賊奴。これ昨宵謀ら。三十兩の東西と。透與。い。程なく。後悔。疑心  
も。其首。起り。う。豫て。竊。書留措。る。兩。波羅の家。姓名と。輯。懐中冊子と  
出。見つる。海原。進。といふ。人名。走卒。も。非。原米。被奴。騙兒。賊。眞の。六

波羅家の捕手の頭人なればとて阿容くどいとやの違らん。遠くゆゆうと追蒐よとて。吾  
徒弟共侶身持一々京師の方へ進行一は背影だも見えざまば。原米路と引違へ。浪速の  
方へ走り々ん。脱落ふたり。と取かへして。更ふあままで来る程。天の明く時の移る一ふ  
未だ遠く得さるむとて。こゝらふ在りの既よえや。汝が運の殫るる。覺期とせよ。と罵ま  
ば。岩幕も亦槍衝立く。昨宵をうまく謀らま。空骨折る腹瘻。手製せし持參の槍の串  
刺よまよくきんむ。と猛く勇めど今更ふ。本事の程と揣りうひく。撃も蒐らす聞さけ。無名  
氏騒ぐ氣色もなく。わざいと強盜共。汝等主從鎮西ふ。經高が隊は在り一時。久しく高  
祿と食あぐら。主の凋落を外見く。人より先よ逐電一つ。天羅の中は漏さまぬ。命を惜ま  
世と潛び。心よもあらぬ入道一。無往の巷は落留。夜おく。旅客と欺き宿一。竊に殺  
しく物と略。邊航ノ平次將純。若黨若幕九郎等とて。これ豫くよりよく知まり。然れど  
も昨宵汝等が。首を懸け預け措一。烈女秋布主從と。無異に救んと思ひ一故也。然るとお  
は幸ひ。免さりとて思わく。其死と急ぐ。天の冥罰刃と受よ。と指招き。嘲り誇る

立ちりける。物おいのせを撃留めよ。と敷圍き叫ぶ邊航が。擬勢を憑む岩幕坊。槍と拵て衝懸  
ると。無名氏早く身と反ら一。穂頭を左手に握留め。見りと引抜く勇士の大刀風。槍の真  
中所落を。程もあらせす邊航が。勢ひ悍く衝く竹槍を。彼此二三度違は一。足と飛一。踏  
落せば。左右齊一山刀と。抜き閃めり一。撃んと進むと。丁々礮と受流を。奮撃突戦目覺一  
く。一上一下と秘術と盡せ。無名氏ふえや。所立ちま。色めた騒ぐ。兩箇の惡僧。逃んと一  
る。岩幕の背と太く劈き。苦と叫び倒さ。邊航もえや。二三箇所。淺夷負ひつ。破結  
ぶ。生死もあし刃の電光や。天の俄頃。結陰。穉々と鳴雷。朝立の雨。瞬間。松が枝洗ふ  
樹下。閣蹴揚の泥。お俊俊さ。撃大刀取次。ふあり。邊航も肩尖より。無枝竹削。所付き  
き。刀の刃。新刃の無名氏。神術奇特の働さ。稲叢陰へ退さ。笠と騎一。つ初めより。目  
成詰る。秋布主從。心も天も稍齊。雨の小歌。ふ立出。適候。恩人。と聲とかく。ま見かへ  
り。今まで其處は居給ひ。欺。賊僧をまども殺害。あま。地方の者。お抑留せられ。係合  
んの無益の所行。とくこの間。去給へ。やよとく。といそが。折ら。雲の再び聚り。





又降そくぐ驟雨ふ。撲きく忽地息吹かへま。岩幕の袖身と起し。撃んと進むと無名氏が。手  
煉の刀尖愆とす。細頸撲地と撃落せば。發と立たる血烟を見捨り急ぐ主従が。往方も天も  
定めおた。恩と情の別き路ふ。名残もいと惜まる。不測の奇遇。再會の。三歳の後とまつ  
原の。松の下蔭漏る雨。濡きつゝ浪速へ起きたり。

第十六回

良僕夢寐よ美玉と摧く

原是浪速の都會の福地。船舩日々入津し。万物輻輳せざる事なく。商賈貿易の港より。  
民の電に賑ひぬ。こゝも亦石上。ふるた都の迹よりあれど。平安京に比まば。目よ山水の勝  
景なく。只海水の眺望あり。是を俗地といふ時。人間疎まるべく。こゝと福地といふ時。  
守錢虜の讖と得つべし。さまば又秋布の。無名氏より列まより。俊平扶掖ま。其日浪速  
ふ著ふけま。天満の邊なる。客店に宿と定め。主従日毎ふあちこちと。徘徊せざる限も  
なく。仇人鼠川嘉二郎が。在所を索討めつ。又いくばくの日を彌る。三伏の炎暑漸く冷  
く。魂祭る宿。月見る臺。謀月朔月と過るまよ。己が宿のいさむら竹打戦ぐ夕ぐ。毎の

秋の上風と。尋しけん。然らぬだ。秋の悲し。たものおた。塚と出むと誠めたる。閨秀麗人の  
幸おたや。親と喪ひ良人。後まき。答は寝千と枕と。萬里の逆旅。仇人と索る。秋布が心盡  
し。いふべうも非ざるべし。ゆく時の杖と。憑き坐る時。林車とも思ふもの。俊平只一  
人の。渠も亦さるもの。慎み深く見ゆめ。男女席と同ぐうせむ。自ら授受むといひ  
き。教と忘まざる。あらざめれど。旅ふいあれば。そまも甲斐なく。疎めバ辭敵もなく。親  
しめ。後安うらす。左に就くも。右に就ても。心のいと休らぬ。旅宿あがら。羊くれ。浪  
速。春と迎へくも。仇人の所在と知るよ。もあ。世の暖ふからん。比。肥の州。趣さ。浦  
二郎ぬ。とも訪ふべく。鏡の宮へも請ん。て。おやも天満ふありける。お如月の下流より。秋  
布の何となく。心地煩。しく見え。う。俊平大く驚き憂。醫師と招きて。藥劑と討め。さま  
ま。は勸るふ。然も。て。打印を程ふも非ず。只とり。は瘡發り。苦む事の大う。さ。ら。ぬ  
も。瘡ま。又忘ま。る。が。如。この全。く思ひ。屈。し。る。氣。の。う。さ。さ。う。い。ふ。病。病。氣。長。く。保。養  
ま。る。こ。を。よ。けれ。と。醫師。が。い。へ。今。更。舟。行。さ。り。と。も。西。國。へ。趣。ん。事。稱。ひ。が。さ。か。り。せ。く

くまる程は春の暮。日影鬱悒さ夏の来小けり。天満の旅店の西面小て。暑熱は得堪難た  
 状。いふふしてこの夏と送らん。難波村の邊より。よれ借屋のありといへば。俊平は其人小  
 就く。件の家状見ふゆきさる小。一町人の女隠居どう云ものゝ住捨さる迹ことう。ふりさき  
 ども障子席薦の類まで。具らむといふ事なく。庖厨どうも三間あり。浴室も速うらむ假  
 深の僑居ふい。こゝふ勝る處のあらう。と思へば。聽く立かへり。秋布ふよと告る小和  
 殿が宜しと思ひおへ。どうい又何とう擇ん。何處へありとも行くべし。と云は俊平歡び。と  
 肆月下句は主従二人。難波村へぞ移る。是より後も秋布の病著本ど瘥らねば。俊平は  
 又醫師と易。療治を乞ふ事初の如く。かく今茲の秋の季より。秋布が病著漸く重て。  
 打臥せし儘枕あがらむ。俊平いよく驚き發て。問ふくこまきと看とまじもさる所為より賢  
 からぬ。壮伎の手一つより更ゆくべうも非どまば。いうて備姿々ことも。資よせばやと思ひ  
 つく。と家主は相譚ふふ。この借屋の家主は。月籠屋店九郎と呼まさる。小高ひとまる者  
 よて。相距る事五六間。いと橋小なる母屋は住り。其性木訥かりけまじも。聊實情ある者お

まば。快く承引く。傭人と索る程は。陽月の初は至りて。輪乘といへる老婆を將く来り月備  
 まどく薦めたり。渠は相肩の棒太と呼る。西の船場なる輪夫が母あり。齡は五十は餘りぬ  
 べし。口よく利く。何事も真實だち進止へば。此日より留め置。火打水汲む炊の所行。  
 醫師許藥劑と乞ふも。俊平は此の資より。一肩休る心地より。然まじも折々切錢  
 の。耗る事おどのあると。貧しき故は心汚穢き。輪乘が所為歟。と思へども。思ひ捨問も糾  
 さず。どうくを程は。此年も。残り少なりふさり。素より盤纏は更を缺ねど。旅よりあまば  
 年の尾の營ミとまべくもあらず。俊平は長き夜をがら。發通となく起出。秋布が枕邊を  
 さし闚き。爐は炭と續ぎ。湯薬と薦めて。一夜さも懈らす。輪乘は漸く居狎る。隨ま。ともすま  
 ば仕こさる。傍痛き事にあまじも。秋布も俊平も。今更は渠かくてい。と思へば亦何事も  
 得いぬ。一夕稀なる徒然おまば。輪乘は火盆と中より。俊平と對ひく。江潮上の物  
 がさりまじまる序。後室さまの病著の。氣のかさどう云ものゝやあらん。どうく。嬌婦は  
 暮し給へば。さる病著の發るぞか。御身も餘り物頑。老朽さる身もあらぬ。後室

さまを慰めいせで。さる病病の發るまで。うち置き給ふ油斷は非むや。乍廢る情由のあ  
 るうに知らむ。男女の主従が僑居し。女夫あらむと宣ふとも。誰う實事と思ふべた。こ  
 ろに任し給ひお。せん術いいくらもあらん。鈍きも事は依るものを。と眞實だちて弄く  
 と。俊平いいと淺ま。と思へ。他事は終る。早く卧房入りたるが。日比の疲勞は熟睡  
 と。さり。かく。秋布の。次の日の早旦より。猛は病著瘥り。息か。ま。今日一日も早く。肥  
 の刑へ赴くべ。師走の天は雪と犯し。路おて。再び病煩ふとも。こ。ふ。死ぬるは勝べ  
 と。此日より。只顧いそが。立。己。ま。俊平も禁めうね。輪栗ふの身の暇とど  
 らせ。店九郎は宿所を返。年極中流は主従二人。西と扱て。立出たる。い。への人い  
 へる事あり。酒の禮は始。亂は終り。人の五常を心は具。五常を全くする者稀。君臣  
 の恩義。夫婦の情愛。交遊の信實。師弟の授受。好憎褒貶。愛惡取捨。其始ありて終。た。此  
 々。皆是あり。悲。迷悟相速。善惡比鄰。おせり。扱。村澤俊平。忠義純  
 粹の心とも。逆旅は秋布は仕る事。二。及。男。女の禮儀と正。夜。一

室は睡る事なく。晝も職言をも慰めず。其性酒と嗜ね。醉狂の失。其身健をりけま  
 ば。勉。艱苦と辭。事非む。今の世。いと有。老。貴。堅固の良。僕。ま。秋布も深く  
 頼。聊も疑。む。さ。主。從。相。愛。親。け。ま。も。禮。讓。と。亂。る。事。の。お。た。もの。から。  
 秋布が長。病。著。俊。平。日。夜。看。病。枕。邊。は。侍。折。の。彼。嫂。の。溺。る。時。手。も。  
 こ。ま。と。助。け。ざる。事。克。ざる。の。勢。ひ。あり。其。起。んと。欲。する。時。抱。扶。け。柱。は。倚。め。其。卧。ん  
 と。欲。する。時。亦。如此。せ。ざる。事。の。お。け。ま。心。漸。く。迷。ひ。め。胸。うち。騒。ぐ。折。も。あり。けり。  
 有。如。之。程。俊。平。一。夕。傭。婆。々。輪。栗。は。秋。布。が。上。は。就。浮。さ。る。事。を。云。云。と。い。い。ま。と。よ  
 くも聞。う。で。聽。て。卧。所。入。り。さ。る。夢。も。非。ず。現。も。お。く。妄。想。不。覺。胸。は。浮。ま。く。沈。く  
 くと。思。惟。る。後。室。に。其。齡。尚。世。も。足。ら。む。生。涯。彌。婦。ら。ん。事。人。情。は。遠。ふ。似。と  
 り。且。其。容。止。の。艶。麗。ある。京。鎮。倉。も。多。く。得。が。こ。彼。柳。下。惠。が。心。とも。心。と。一。つ  
 と。よく。これ。仕。る。とも。己。が。齡。も。ま。ど。四。十。不。足。ら。む。男。女。の。主。従。只。二。人。旅。泊。年。を。累。ん。よ  
 誰。う。情。由。お。し。て。疑。ざる。べ。た。譽。は。今。宵。輪。栗。婆。々。い。ひ。けん。事。の。お。べ。せ。の。人。情。の

随ふ〜。そまふ違ふ〜疑れん。愚魯ある所行は似たり。倘潔白と旨とせば。辭去るま  
 ま者あり。然ほど今更に後室と打捨て。獨旅路は呻吟せまぬら走るのいよく不義  
 かまきバ己が主従の相別きんとするふ離き難た。天縁の致を所歎。情を夫婦ふ相似たり。  
 衰れ己ま。男子と生れ〜生甲斐。只此美人と妻とせば。百年の性命を。一歳ふ縮るとも惜む  
 べ死事はいあらねど。人おの〜過世あり。主とあり家僕とある果報に任せぬものよこ  
 そ。うとてかりける己が身や。と果敢ふ死事さへ思ひ宿の。迷ひふ胸と苦〜め〜と漸醒  
 思ひかへせば。この淺ま〜やこれあがら。膽太くも主の後室。懸念まつるの何支。總角の  
 比より〜。主は仕〜私あく。心ざほの正〜死を。よく知らまされバこそ。若死婦人。冊け  
 て。仇討の供をまら。立せらまるとるこれあるふ。妄想ありとも情慾ふ惑ふ〜不義の奴とあら  
 ば。此兩歳の艱難劬勞も。忽地泡沫と消ぬべ〜。己まよの惡魔の身。憑ふ〜狂まるとやあら  
 んずらん。曩は彼無名氏が。これと相〜色慾と。誠めとるも所以あはるる。恐るべ〜慎むべ  
 一。と心で心と警めとる。これより後の情と禁め。慾と征まるとる工夫をせばやと。思ひつ、又購

りたり。間話休。顯有然程は秋布主従の。其曉は浪速と立。三四日とゆく程は掃磨と  
 備前の封疆ある。大山嶺の麓は采ふけり。比は十二月の下流樹抄の木葉落盡〜。松柏の  
 操と顯。山川の流水半涸。石背も渡は堪たり。山に雪の上は雪と積。羊腸ある路絶  
 ぬべく。里の萱の軒は萱と藏め。焼火の儲優。寒風肌膚を犯〜。速破の音も耳に留  
 り。群雁水田は氷を推く時。近村の堤も目ふ廻け。一橋渡果て。亦一橋あり。一程行盡  
 一。又一程長〜辭曲はいへる事あり。春は旅夏の温泉は送らま。秋は野遊び冬のこもり  
 居。旅中の艱苦いづれにあまき。玄冬の寒けは朝陽光の短き時。萬里の路とゆうん事。壯夫  
 もおほ病る。况蟬蛸とる一婦女子の。霜と載き雪を犯〜。心はく〜のあまさる肥の刑  
 速くゆく程。大山嶺の麓路は。秋布は舊病の。猛は殺〜堪ぬばう〜。瘡小胸と苦め  
 る。〜。辭の難義は俊平の。枯尾花を折布せて。さほ〜は勲る。こ、人象違〜。腹  
 夫旅客の過るも稀ある山脚の曠野ありければ。いとせせん術をたものうら。穢〜とけ  
 る。北薬と搔探り出〜。疾用ひんど〜つきども。齒を切〜受くべうも非ず。湯を乞ふ

もよりのおければ、石汚ありとも揃ひもく来く。沃ぎ入まんと。速く彼此を見あるきつ。  
いと清らうある流水を合手、揃ひ揚れども、僅ふ四五歩の間、水の漏盡く。幾過も亦勞  
く功あり。已と得を揃ひ水と。そが僅ふ口は含まき。舊の所、歸来つ。病臥く果敢  
くく心の人心地もなきが如き、秋布と抱き起して、漸く丸藥と。口づつ、件の水と。  
口中は移入る、水。藥の水とも共ふ。受納るぬと思へども、瘡の未ど治らず。抱る僅ふ  
はくくど、其顔はせとうち目成まば、西施が心を病る時、大真が濁と患る。面影もかくあり  
けん。思ひつ、稍見蕩る、まで。心地迷ひ胸うちさびきて、兼自ら誠めたる。忠信孝義  
の五常のものうら。か、る首尾又あるべし。と思へ共かく迄。病惱る人というがせん。  
手足の大きく冷給へるよ。いざ温めてまゐらせん。とひとりごち手ととり。口が懐ふけ入  
きつ。足の草鞋と脱捨さく。口が太殿の間、指あつ。温るとの久し。口が藥の功よりと  
りけん。秋布のとり詰らまき。瘡の僅ふ治る。口がまかへり。身邊を見まば、生平のあ  
らぬ俊平がいとも非禮ある分抱。こを何事ぞ。と驚き怒る。衝放さんと一つきども。俊

平の抱きさる手と固う。些も微めを、思ひ詰る氣色も。喃後室さほ。二とせ以来忠と  
義の外、胸は物もあらず。俊平がかくまで。迷ひを不便とおぼさむ。繋の長き  
病著と。看どり冊き朝夕な。親しく仕へまゐらせ。其折不覺と思ひ初。下ゆく水も濁江  
の深き迷ひをいく遍敷。已まらざればと誠め。磨けど曇る玉鐙の。道ちらぬ色情胸を焦  
く。いまくあつ、うちつけ。いひ依るさつきもをり。いふを思ひを肌と膚合せ  
鏡の二面。口より口へ移る。水の妹背の盃と。さまが頼む二世の縁。三世の縁の主の  
後室。既ぬいおれた君おれども。不義と知るつ。今更。思ひさられぬ。凡夫の執念聞はれ。只  
一夜さの情とかけて給へう。やよ啼々とかた口説く。艶語も采る、秋布の腹立。さふ  
聲ふり立ち。るる俊平むぐん。和殿の惡魔の魅入。年采濟する事。のさく。良卒義供  
と衆人。お譽らまき。身と恥もせて。稱のぬ事と知りあがら。口づつと捕へく。不義非道なる。望  
ま返を言葉の非す。口放さむ。と敷園。揮つ敵つ。嚙著く。脱放ちつ。一反ばかり走退ど  
も人家速き。山脚の野邊。夕おえ。采る人もお霜枯の。虫ちらぬ。口づつ息と轟く胸の



五右衛門



秋

あけの  
 朝  
 おりへ  
 をうけ  
 の  
 うき  
 鶴  
 舞

十四  
 東京金屋出版社

九条...

東京金屋出版社

地車の長橋渡る心地。怖氣疎さへ朽としく。四下見らる、有聲の女子、憚く見せとも目  
小脆き涙がいと進みける。俊平の飽までふ辱しめられても物どもせず身邊近く立よ  
う。南後室さま。今いなきさる邪正の差別の。素より承知であけり懸慕。よーや不忠とい  
る、とも。非義横道といゆる、とも。濡ぬ先こそ露とも厭へ今更否と宣ふとも。志を改め  
る。舊の素地よあられんや。旅も同行せの好意。とくもかくとも過世より。結び一縁と諦め  
る。靡さ給へ。と手を取ると。秋布の吐嗟とばかり。振放ちつ、聲戦しく。やよ俊平。世の常言  
よも。非道の前は道理あり。といふ事あまは義理と並ぐ。いひ懲まよあらねども心と鎮め  
る。聞ねうし。迷ひふもせよ思ひた、と。憎しとくいふよ非ず。女子の身とも親良人の。仇  
と撃んとかくまで。旅路の艱苦も厭ひぬ。己らにが節操捨て阿容く。と。和殿の望は。從  
きんや。宿望空からむして。仇人嘉二郎を討捕らば。爾後いともかくもいゆる、隨ふある  
日もあらん。時と俟ねば何事も。成就がたはたものろよと。この道理と汲みたく。迷ひと霧  
し給へうし。去歳の春鎌倉と。出よ一日より旦暮。頼む和殿のみあるよ。心變る主從

が。今更陝布のせば布の。胸合がくあらんよ。供も立。俱もせ。別ま。て枝撓む。  
此身一つで恙なく。何處までう行るべた。然ればとて速。和殿の心は從ひ難た。薄の目今  
いへるが如し。こころを貞女といひするも。和殿が義士の名と罵るも。今の迷ひと又舊の忠  
義も返走のミからう。聞て死給へ。と理を推し。いひこころゆる。伶俐さ。あろの風は情  
いぬ。柳のいと衰れ。俊平これと聞あへむ打笑ひふ近づた。理りめうし。宣へども。  
三歳兒の老らむ。さる虚言。欺る、者いふ。よく思ふとも見給へうし。色は思案の外と  
う云ふ。三年三月の後と契。心長聞く俟者あらんや。此方向給へ。と引付け。携るを透  
さす振放つ。手弱けきども烈婦の理。この野の露と滅るとも汚されとく。懐ある命婦九  
の短刀と。手早く見ると引拔。胸前逼て衝懸き。俊平あちあち身と反らう。腕捕り冷  
笑ひ惜死。尚早うる。戯まを。と揉居。刃と奪ひ取らんとせし。秋布のちを奪れ  
いとて。柄は左右の手と掛け。挑み争ふ。一生懸命其身と壓し踏々と。鞭びかされ。刀尖狂  
ふ。乳の下ぐさど刺貫き。灸所の深手。雲時もあらず。苦と叫び。什備を。俊平これ驚



さく。こをくゝいうふ。とばうりふ。寄まくまれば秋布の頭を撞疾視く。怨一たうな村澤俊  
 平汝が心の迷ひふより。兩歳以来千辛萬苦の。旅宿も竟は仇とあり。親良人の讐敵も得撃  
 す。非命は死せる朽惜しきよ。かうあるべいと知るあらば。早く肥前は起さ。浦二郎ぬいと  
 訪ましものを外は資のおたのミあらう。今の神ふも佛も棄られし身こそ悲しけれ。南無  
 阿彌陀佛。と唱ふる。言葉の中は唇の色も變りて息絶たり。こゝふ至る後平の忙然と一  
 と手と又き頭を低くあさり。玉碎けて梵石の堅石を恨み。花落る夜嵐の烈さと憎む。  
 人の命の果敢あうりふ。菩提の心漸く萌る。迷ひの雲霧霽るか。忽地宿酒の醒る  
 如く。頻るふ慚愧後悔。浩嘆やる方もあうりふと。扱あるべきはあらざれば亡骸は打對  
 ひく。後室様く。某をさぐ憎むとも憎む飽あかば走らぬ。愆といひあがら。あまりよ  
 大く角ひ給ひ。刀尖の狂ひより。深羨は命と預され。是某が手をもつ。害一奉る  
 一ふ異あらず。かくまで五逆十惡の罪と犯せ。某を。身を牛裂せしるるとも。人見く足  
 れりとまべたにあらねど。切くもの罪滅し。時を移さむ腹うた切て。死天の旅路は従ひま

つらん。死ぬる命を惜うらう。主の仇とる嘉二郎と。得撃ざることを遺憾けれ。加旃舊里よ  
 り。一箇の姉の在あがら。幼稚き時は列れより。其存亡だも知るよよい。思へば善惡賢  
 不肖。いづれいあれど人怨の禁め難た魚の餌。釣ある事と知つとも。餌と貪るふ相似  
 たり。迷へば小人。悟れば賢者。懺悔も今の甲斐どふた。惡ある身を恨るの。兼は彼無名氏の。  
 相せし事の不幸ふ。當りも是過世ふ。作し業報あらんうも。いでや自刑と行んと  
 て。諸肌脱て刀と拔取る。刃ふ袖と巻添て。南無とばうる。刀尖と吐へぐさと突立る。と思へ  
 ば頻るは腹痛して。愕然として驚き覺けり。是曉方の夢より。身をか難波村ふあり。夜半  
 小臥する儘ふして。行燈の油竭て滅んど。一つ、幽かり。原来夢ふてありけるよ。と思へど  
 もか不胸の鼻さて。腋下より背より。冷やうか汗の流れて。寝衣の裏と浸りたり。こゝよ  
 漸く心と鎮めて。獨はくゝと思ふやう。それい去歳よりけふまでも。忠義の志を移せし  
 事か。只後室の長き病著と。いと痛ましく思ひつ。枕邊ふ侍り折々。尚うら若た齡ふて。  
 容止も美去た。早く嬌婦より給ひをら。こよふた不幸ある者を。况仇人と撃んとて。久

一旅宿ふゆくりなく病著ふさへ卧し給ふ心苦しき限をこゝとて瘥らせ給へかしと思  
 へば只何となく憐む心頻りにして常にも見つる後室おがら其容止の美しきと惜む  
 心もつたぬ折うら甲夜は輪乗婆々が戯けた問を語りせしを聞捨てて卧房ふ入りしが寝ら  
 れぬ儘は情思へば長旅宿は男女の主従。貞操忠義を造りおしする。臆魂とい人知ら  
 ず。大うさの輪乗が如く疑ふものゝ多からぬ。かゝれば是瓜田の履。李下の冠。思ひざりけ  
 る疑似はあへるも亦主従の不幸ふこそと果敢ふた事と思ひつゞけて寝るどもあらず目  
 睡さる。夢といいへど世ふあるまじた。主は逼りて。職。命と預させまゐらせし。己が心の  
 汚穢し敷。告ねば人のあらむといふども。いうてうの己が心は。恥ふた事と得ざるべた。身の  
 暇を乞ひ辭し去て。潔くせまわしけれども。今よしく其事かかぬを。宿志と遂させ給ふ  
 折。此。曉の悪夢を告て。懺悔して法師ふあらん。是より外よまをばなし。と吐し問ひ腹ふ答へ  
 深念の臍を固めしが。是より後の初も。優々謹慎と宗と一つ。よく秋布は仕へたり。却説又  
 其年の暮。春も花月の初浣ふありつ。假深おがら。浪速津ふ。二とせの春と迎へ。鎌倉を出

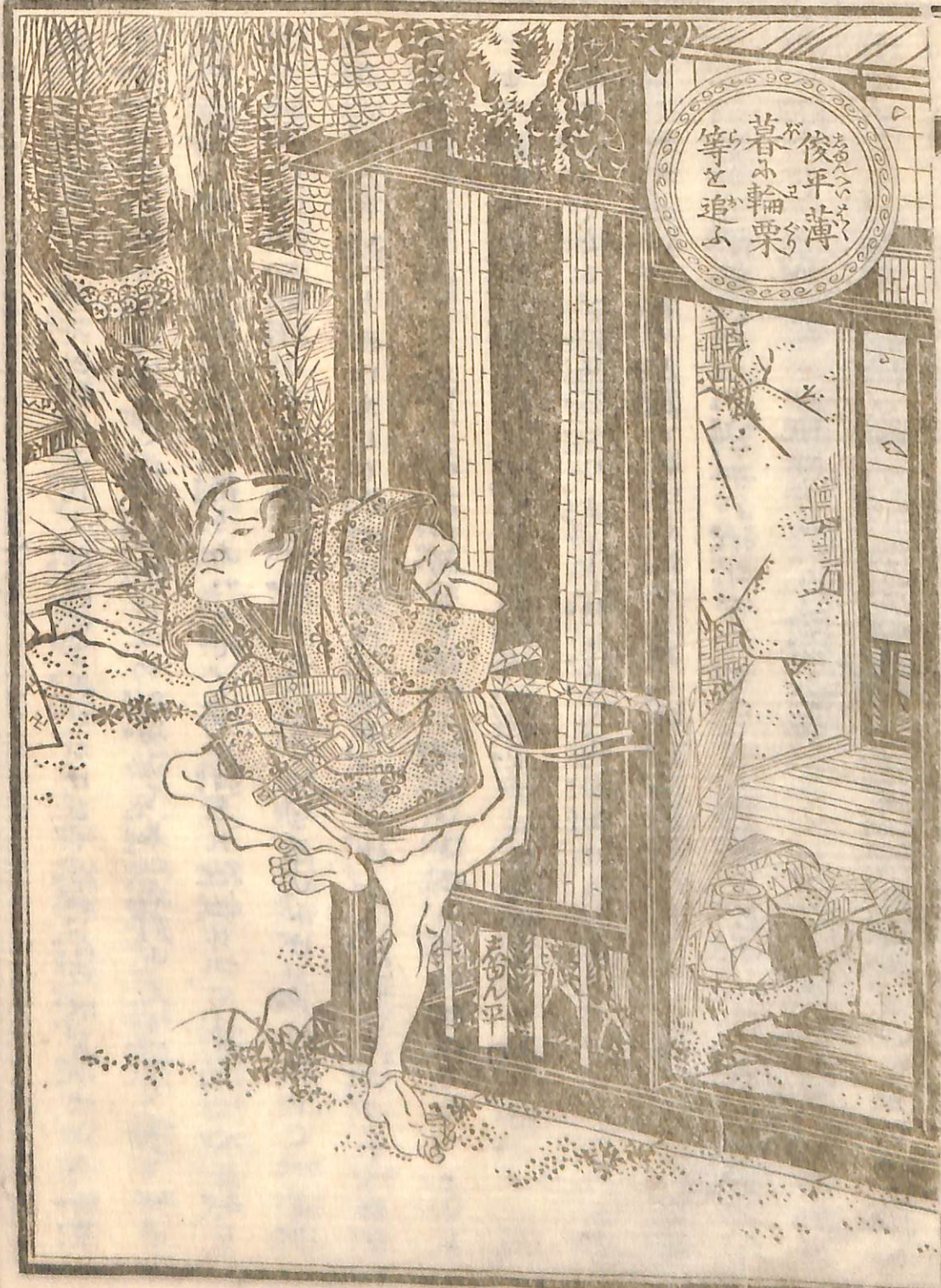
一より既。手捻はありふたり。かくくの又何の日ふ仇人嘉二郎は環あふ。宿志と遂んど  
 秋布が。只管は焦燥。病むがうへお苦とませいと。俊平も慰めうひく。お不療養ふ心と  
 盡をよ。如此くの真の名醫ありと聞えう。俊平の人と走らして。件の醫師を招き々  
 り。當下醫師は秋布が。脈と診ひ退き。俊平は再くやう。婦人の病病の難治の症也。あられ  
 ども一方あり。用ひ給ひ必愈ん。只一個の藥劑と缺のミ。此藥劑は病家あらん。さばま  
 旅泊の事おま。携給ふや否と知らず。と云は俊平膝を進め。そのいうる物ま。とせ  
 己しく問へば醫師答へて。得難た物まの候はす。病人の臍帯。この一種と加味をる時。餘  
 藥も共は功驗あり。携給ひ幸ひあらん。と云は俊平歡びく。走て病牀に到り。秋布  
 は如此く。と醫師のいへるよしを報る。秋布も亦歡びく。現にらぬが臍帯。今も枕の邊  
 とおささぬ。護身囊の中はあり用ひらま。出給へ。と云は俊平遠く。舊の一室。一  
 さま。醫師ふ又云云。といへば醫師は領さく。然らば病病の愈いつべし。其今湯劑一貼  
 を調合せん。此一貼。清浄水三碗をも。半碗煎用ふべし。初の先武火ともつてし。中

ごろより文火とてせよ。けふ下晡より黄昏に至る時の煎法當り分量の如くあるべし。煎得て半分あるとた彼臍帶とも煎むべし。こまより文火を用ふる。日の將暮んとするに此薬と用ふまじ。七箇日より平愈せん等問ふま給ひて。といひつゝ一貼と調劑し。醫師の早く辭し去りぬ。有如之而俊平の。其日申の左側より件の藥劑と煎むる。少選も他手は任せず。煎ぐ半分はあらんとせしとた。病牀は起さず。秋布より告れば。秋布の臥あがら。護身囊と搔拿く。俊平は透與せしう。俊平のこまと得く。又土爐の邊は退き。護身囊と披き見る。内ふ種々の神符あり。又吉次と秋布が二親の戒名と記し。楮位牌もありけり。そが間紙に包るものありて秋布が誕生の歲月日時と書つけし。是なるべし。とうち閉く果して裡面は臍帶ありけり。即便これと藥鍋に移し入る。神符と倍牌と。臍帶の裏紙の。舊の如く囊は納めて。柱の釘は掛置きつ。霎時も土爐の邊と去らで。分量を試る。果し黄昏時を造り。半碗はかりしう。遠く茶碗に移し。病牀もてゆたつ。秋布は薦めけり。姑く俊平の護身囊と返さんど。掛

る柱の邊を見る。件の囊のかりしう。このいうほど訝りて。輪栗を呼ぶこまを問ふ。輪栗の素より知らむといふ。渠の手癖のようらぬものふ。動をま切錢の耗る事もあるまじ。いと疑し思へども。正しく見ざる事のおた。苛刻の責も問ま。黄昏時の心いろしく。霎時こま柱は掛し。油斷大敵。悔及ばすこよま。愆しけり。と頼を病し。云云と。秋布は報まれば。秋布頻に嘆息し。護身囊の惜む足らねど。内は貴き神符あり。親良人の位牌もありし。失ひぬるの信心の疎あるに似てもかこし。然るに急がばいよく返ら。あづう小穿鑿し給へ。と云は俊平の緊しく。涉獵し。秋布の次の日より。病著日々平ぞ。食もま。夜もよく睡り。僅七日ばうりし。心地清なり。ありしければ。俊平深く歡び。醫師は厚く酬とまたり。あうれどもいぬる夜。護身囊の失する事。快うし思ふ。おん折々いひ出。輪栗婆々問質を。輪栗はいたくうち腹立ち。身過世の。多ければ傭人ふあり侍まども。被錦をま。護身囊の一箇や二箇。私し何せん。疑れての勤るも要あり。身の暇と給ひね。とこめくも外聞を

ければ。いうふせまーと思ふ程ふ其次の日輪粟婆々の。俊平は打對ひく。さうの嫁が昨夕  
猛ふ産一つと報来一は。後室さほの御病著も。大うさあらず産を給へ。且く身の暇を  
給ひせ。嫁だも肥立侍りあは。後こそ參らぬ。といひたり。俊平は此婆々と。好人物との思  
ひもど。若れ婦人の長き病著と。己が手一つふ看とらん事の影護きよしもあまバ久く留  
め置されども。既ふ病著瘥を給へ。西國行も近きふあらん。然らば婆々ふ要あ。と尋思と  
一つ、秋布よ。如此く。とよを告ぐ。輪粟は暇と取らせたり。登時秋布の。一日もえやく肥  
の州へ。赴ん更と量るふ。俊平霎時沈吟づく。陸地の仇人の所在と撈る。便宜をたふあらざ  
めきど。大病の後いく日もあらね。舟行よまを者あるべうらむ。某船場へ赴た。西國へ  
歸る船船の。有無と問定むべ。其船必あるべけき。旅路の用意と給へ。と云ふ秋布歡  
びく。遺なく物とり鳩め。仇討免許の御教書の。裏は行囊に藏めされども。盜難搦まがさ  
ければと。是回秋布が。項は掛るよ便りよく一つ。俊平は先家主の店九郎は別を告ぐ。  
儲賃を遺なく取らせ。行装と整へて。西の船場へ赴きたり。有然程ふ秋布も。早く旅路の身

装。一をさく。俊平が還るを俟。其瞋昏と思ひがけなく。今朝身の暇を取せさる。輪粟  
婆々走り来て。後室さほ。更こそ侍き。俊平どのが船場にて。暴ふ病病ふと詰らきて。いと  
も危く見え給ふ。折らうらさうらに。が通りあひせて。うちも措きす分抱一つ、宿所へ人を走ら  
して。己が兒の棒太を招きよせ。駕籠もて送りかへさばや。と思ひひけきど。如右にて。途中  
で死ん。と人愈いへり。然けきども。俊平どのの今を不心地に慥。御身は一言遣をべた事  
こそあまきと。いゆる。よ。棒太ふ駕籠と吊して。御迎ひよまゐるふ。た。いざ給へ。といを  
かせ。秋布大く驚き患て。その心もとあた事。先家主よこれらのよ。と告ぐ。留守とも愚  
めと。立まくまると。輪粟婆々の。速く推禁めて。否家主どのへの。己らに。ガのたてん。棒  
太もまちな。といひながら。裳と褰げ。出んと走る。折家主店九郎の背門をり。縁由と洩聞  
て。咳き一つ、借屋よ来つ。秋布等よ打對ひく。俊平の。の暴疾の。其輝の。越。彼處へも  
よく聞えさ。今宵敗盟の出船ふ来ると。諸賈債もせられ。と。さ。て。の。船。ふ。の。来。ら。ま。ま。い  
けれ。留守の。吾儕が。心得。り。疾。々。行。く。看。ど。り。給。へ。と。云。ふ。秋。布。應。答。も。心。い。そ。く。い。ひ。捨。り。



出ると遅し。駕籠并よする。相肩棒太。三里の非三乗移らいつそが儘は擡出せば輪栗婆  
 々も。足中草履穿あへむ。齊一駕籠に附そふ。東と望くぞ走る。店九郎の外小立て。目送  
 る程。小日の暮々。戸を引閉んとする程。俊平が歸り来よけま。やとばうり。膳と漬  
 一。裡面へ入ます。左見右見。御身の響ふ船場より。暴は病疔の發り。とて。輪栗婆々が  
 駕籠さへ吊して。後室を將てゆたよき。と告ると。俊平聞あへむ。その訝う。死事よころ。吾們  
 の病疔の發り。事か。且立ちへる中途。にて。輪栗婆あぬもいよ。怪。速くゆり。  
 と追まくる。と店九郎の呼留めて。御身の西の船場より。歸来つる。う知ねども。駕籠の東へ  
 走りよた。伏見の船場をらむ。と心はくると見かへりて。心得たり。と夕間暮東と望く。追  
 てゆく。畢竟俊平が。輪栗等を追籠て。又甚度ふる。話説かある。う。次の巻。小。辭分ると。馳  
 ねかし。

松浦佐用媛石魂録後編卷之三終



